



ニュース

No. 27

October 10, 2003

愛知大学豊橋語学教育研究室

特集 このごろ巷ではやるもの —最新アジア事情—



上海のバンド（外灘）

CONTENTS

◎ 特集 このごろ巷ではやるもの

— 最新アジア事情 —

- | | |
|--|--|
| • 房子 车子 孩子(張 筱平)..... 2 | ◎ 漱石の外国語教育論(葛谷 登).....14 |
| • 中国でする「はじめて」の話(中西千香)..... 4 | ◎ 日本語教育と私の教授法(梅木陽子).....16 |
| • 近頃タイの巷に流行るもの：
タイの若者と携帯電話
(アッチャラー・ウンタラクーン)..... 7 | ◎ 中国映画への招待.....18
マルチタレント・姜文(ジャン・ウェン)(藤森 猛) |
| • 台湾の巷で流行る日本(佐藤一樹)..... 8 | ◎ スイス〜ツアコン体験談〜(安田淳子).....20 |
| • 韓国の若者たちの中国語学習ブーム(李 泰王).....10 | ◎ LL Tea Time |
| • このごろ巷で流行るもの：ロシア・モスクワ編
〜イチョーット ヴ モーヂェ〜(清水伸子).....12 | • 韓国と韓国人の素顔2002(山田知美).....22 |
| ◎ 私の外国語修業時代(湯川治敏).....13 | • 魅惑のタイ留学(杉本佳織).....23 |
| | ◎ 公開講座「言語」2003後期プログラム.....24 |
| | ◎ 外国語検定試験合格者に奨励金を贈ります！ |
| | ◎ 自習室だより |

房子 车子 孩子

—現代中国人の 注目消費スポットを語る—

国際コミュニケーション学部

張 筱 平

中国人は日常生活のなかで、何が注目されているかをまとめて非常に簡潔な言葉で表わすことが好きです。その言葉は、生き生きとした豊かなイメージ、ユーモアに溢れています。「房子 车子 孩子（住宅、自動車、子供）」というのは中国人の現代生活の注目消費スポットについて簡潔に言い表した言葉です。

前世紀の60年代から今日まで、中国人の注目消費スポットはおそらく次の四つの段階を経て来ました。第一段階は60年代の十元クラスの「高級点心高級糖（高級な菓子、高級なあめ）」。

第二段階は70年代の百元クラスの「三转一响（回るもの三つに鳴るもの一つ）＝（ミシン、自転車、腕時計にラジカセ）」。

第三段階は80年代の千元クラスの「四大家電＝（カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機、エアコン）」です。90年代以降から今日に至るまでに、中国人はもうほとんど衣食と日常生活の必需品の問題を解決してしまいました。そこで消費の目を次第に「万元^{クラス}級」に向けるようになってきたのです。つまり、「住宅、自動車、子供」というのが今、最も関心を持たれているものなのです。

実際このような分析も、中国社会全体の消費から述べているにすぎません。一時期ごとの注目消費スポットは、どれもその時代をリードするものであるはずで、中国の消費をリードするそのグループは、一般にみな都市の裕福な階層か、あるいはわりあい裕福な階層のどちらかです。現在、中国の都市と農村、東部と西部、就業者と失業者の貧富の格差はいずれも比較的大きなものです。そのため、ひじょうに多くの人がすでに万元級の消費レベルに足を踏み入れているというものの、千元クラスどころか、百元クラスの消費者も依然としてたくさん存在します。

「住宅、自動車、子供」が注目消費スポットであるというのは、つまり現在の中国の多くの人々が住宅、自動車、子どものためにお金を使うのを惜しまないということです。この消費グループの中には、万元クラスだけでなく、十万元クラス、百万元クラスの消費者もいますが、しかし万元クラスの消費者の数が比較的多いと思います。

まず、住宅についてお話ししましょう。中国の都市の現在の分譲住宅は低、中、高の三つのランクに分けられます。低級と中級の住宅の価格は一般にすべて十万元以上ですが、数万元で買った人も少なくありません。これらの人々は一般にみな「公舎から自宅への移行」という優遇政策を受けられる公務員か、古くなった住まいから新しい住まいに住み替えた住民です。私が今住んでいる家は、中級ランクに近いのではないかと思います。しかし私はもう二十数年働いていましたし、大学教員という職にもあったので、家を買う時国家の優遇政策を受けられ、人民元を七万元前後使っただけでした。私の両親と兄弟の今の住まいはわりあい広いほうです。彼らがもともと住んでいた家の土地を、国家が外交部の建物を建てる時収用したため、今の家は基本にお金を使っていないのです。彼らの隣人たちのほとんども、このように都市改造で引っ越して来ているため、今の家を買うのにいくらかお金を使っていないのです。中国の高級住宅というのは、一般的には豪華で広大な面積の分譲マンション、いくつかの家庭が一つになったマンション、それに一戸建てをいいます。このような住宅は一般的にみな人口密度の低い地域に作られるため、施設や住宅管理所などそのほかの条件も自然と他よりよくなります。しかし、価格においては、高級住宅はそれ自身の質に比例するとはかぎりません。土地の価値とその地域の所得水準という要素がとても重要な影響を及ぼすので、たとえば、北京から百キロ離れているにすぎない天津では、北京の中心地に中級住宅を買うのと同じ値で高級住宅を買うことができます。私の知るところでは、住宅の消費においてすべての百万元クラス以上の消費者は、ほとんどが企業家か、高級知識人、上級ホワイトカラー階層の人々です。このような消費者は、現

在の中国ではまだあまり多いとは言えません。

中国の分譲住宅と日本の分譲住宅は違ってきます。日本の分譲住宅は、内装はふつうすべて住宅業者がしてくれます。しかし、中国の分譲住宅はふつうすべて消費者自身が内装を施すのです。このようなやり方のいいところは、消費者が思う存分「各取所愛（自分の好きなようにして）」できることです。しかし、消費者にひじょうに多くの手間をかけさせるという欠点があるのも明かです。私は読書が好きで、閑静な環境が好きです。ですから将来はやはり都市郊外に安い戸建てを買い、心静かに晩年を送りたいと思っています。しかし、内装のことを考えると、少々気後れしてしまいます。

次に自動車についてお話ししましょう。中国市場で流通している乗用車は、主にドイツ、フランス、アメリカ、日本などと中国の合資で、中国本土で生産されたものです。乗用車を買うのは、ふつうみな家の問題を解決した後購買意欲を車に転じた人々です。しかしメディアの調査によると、現在すでに成長した一人っ子たちの多くは、両親のほとんどが家を持っており、みな子供と一緒に暮らすことを望むため、家を買うのを急がず、お金が貯まったら一番に買うものを車に定めるようになってきたそうです。中国の都市の住民で自家用車を持っている人の割合は農村より高く、たとえば北京では、10人に1人がすでに自分の車を持っていると言います。ここ数ヶ月、「SARS」が突然猛威をふるい、多くの家庭が、自家用車の持つ空間が家族の外出の安全と健康を保証すると考え、次々に車購入者の列に加わりました。そのため、中国の自動車市場が、にわかに沸き立ちました。しかし、私のみたところ、現在都市で車を購入できる経済状態に達している住民の数は急激に上昇していますが、本当に行動を起こして車を買おうとする人は依然として多くありません。買いたい人が実際に買うのはちょっとと考え、お金を持って様子を眺めている人がとても大きな比重を占めているようです。私の友人の多くもみなそういう人たちです。私の妻は今一台自分名義の車を持っていますが、しかしそれは本当にひょんなことから持つことになったのです。ある友人が外国へ行くことになり、

自分の車を売りがっていたので、彼女はその車を家に乗って帰ってきたのです。もしそうでなければ、彼女も車を買うことはなかったでしょう。

とても多くの人が車を買いたいと思っているのに、実際に買うとなると足踏みをしてしまう原因には四つあると思います。一つは、中国の車の価格が現在いまなお世界最高の名に値するほど高いからです。たとえば一台百五十万円の自家用車を中国で生産して売ると、なんと二百数十万円で売ることができるのです。二つには、車購入の付加税が一般的に自動車価格の15%以上と高くつくうえ、ひじょうに多くの自動車関連税が理に適っていないからです。三つには、車の維持にお金がかかるだけでなく面倒で、毎年いつも繁雑な手続きをしなければならないからです。四つには、車を駐車するのも、運転するのも難しいからです。それは、交通管理が道路建設の発展に追いついていないからです。妻は自分の車を持ってから、いつも車の維持と、駐車と、運転に悩んでいます。2006年以後、中国の自動車輸入関税がWTOの定める基準まで引き下げられれば、輸入自動車が価格、品質からアフターサービスまで全面的に中国の自動車市場の競争に加わり、中国の自動車購入環境、交通管理、それに道路の建設が幅広く改善されるでしょう。私は、そのとき初めて人々の自動車購入意欲を十分に引き出し、中国の家庭が車を購入する時代が本当に来たということができると思います。

最後に「子供」についてお話ししましょう。一人っ子政策が実施されてから、子供は中国の家庭の「小皇帝（小さな王様）」になり、家庭の消費に占める割合もますます大きくなってきました。親の子供への出費は、主に教育費として使われます。中国の伝統文化はとても教育を重視します。世界が知的経済時代に入った今日、「万般皆下品，唯有读书高（すべてみな卑しく、ただ勉学のみ貴し）」や「书中自有黄金屋（書中おのずから黄金の館あり）」という古い歴史的な観念は新しい社会的意味を与えられました。中国人の親たちで、「望子成龙（息子の出世を願い）」、「むすこよりゅうになれ願女成凤（娘の幸せを願う）」と

思わないものはいません。だから、将来の激しい競

争社会の中で、自分の子供に安定した数少ない一等席を得させるため、万策を講じて子供に最もいい教育を受けさせるのです。10ヶ月の妊娠期間中の胎教から、幼稚園、小学校、中学校、高校まで、さらに大学、大学院に学ぶようになって、親が子供の教育に対しお金を出すとき、すべてを顧みないといわれています。子供に高等教育を受けさせるため、あるいは外国へ行き、より高度な学門や技術を身につけることができるようにするため、衣食を切り詰め、莫大な借金を負うことさえ厭わない親もいます。私と妻の子供の教育に対する出費も同じです。子供に教育を受けさせるために、「借金を背負う」ような状況になったことはありませんが、衣食を切り詰めたことはあります。子供が4歳から大学に上がるまでの間、私達は子供のためにいい家庭教師を数人頼んだことがあります。たとえばピアノの教師、数学の教師、物理の教師、化学の教師などです。私達が家庭教師に支払ったお金は、しばしば私達の時間給を越えていました。現在、子供は大学に通うようになりましたが、私は相変わらずプレッシャーを感じています。それは、子供が大学を修了したら外国へ行って大学院で学びたいというからです。これはとても大きな出費ですが、中国人である私は、これまでこの重い責任を投げ出したいと思ったことはありません。私たちのような親は、中国では本当に少なくありません。

要するに、「住宅、自動車、子供」は、中国の注目消費スポットとなりつつあるものもありますし、すでに注目消費スポットとなっているものもあります。私は、今後かなりの間、この注目消費スポットはあまり大きく変化しないのではないかと考えています。

(訳：中国研究科博士後期課程 中野麻里子)

中国でする 「はじめて」の話

中国研究科博士前期課程
(オープンカレッジ講師)

中 西 千 香

私は2002年2月から2003年1月の一年間、北京語言大学に留学した。これまで短期留学等で中国に訪れることはあったが、これだけの長期は中国語に触れて長い間たつが初めてだった。毎日の学習についても話すことはたくさんあるが、ここでは私が触れた新しい中国の話のいくつかを紹介したい。

1. 做美容 zuò měiróng — エステ体験

エステなどというものは日本では未体験だったが、今回中国に来て一週間もたたないうちに体験することになった。たまたま言語の先生と食事をともにして、そこに居合わせたのがエステの小姐^{シヤオチエ}だったことが運のつきである。「あなた鼻の黒ニキビ多いわね、うちにいらっしゃい。」その一言に負けてしまった。

いよいよ、料理される時がきた。何しろ初めてなので何をされるのかという恐怖がなかったわけではない。横になって、抵抗することもできずフェイスルエステが始まった。顔をクレンジング、蒸気をあて、十分な水分を与えた後、鼻のあたまをはじめてする余分な油分を絞り出した。これがなかなか痛い。「痛いのは汚いからよ。」と小姐^{シヤオチエ}は私が痛いのを少々気遣いつつ、絞りだしていく。次にぶちぶちと眉毛を整え始めた。これが【修眉 xiū méi】である。「あなたの眉毛濃いし、太いけど、きれいになったら偽物みたい…」と小姐^{シヤオチエ}は笑って話す。そしてバックをしている間、ベッドの下から低周波の【按摩 ānmó (マッサージ)】が始まった。同時に、腕や首を軽くもんでくれる。それが終わると「翻过来 Fānguolai !」といわれた。頭の中が? となっていると「爬过来 Páguolai !」といわれ、うつぶせになるのだと分かった。そのまま、背中のマッサージ。小姐^{シヤオチエ}が「好 嘞 Hǎo lei ! 洗头发 Xǐ tóufa ! (はい、じゃあ頭洗うわね。)」といった。髪の毛も洗うのかと思って、いわ

れるがまま洗髪をし、そしてドライヤーで髪を乾かし、かくて2時間のエステは終了した。値段もリーズナブルで、50元ぐらいからある。これに味をしめた私は時間をみつけてここに通った。このほか、【**燙睫毛**tàng jiémáo(まつげパーマ)】や【**蜡疗手护**làliáo shǒu hù(パラフィンパック=蝋(ろう)を使った手のケア)】、【**足底按摩**zúdǐ ànmó(足裏マッサージ)】も楽しませてもらった。

中国でエステは日本ほど贅沢なものではなく、気軽に利用できる一面も持っている。特にこの一年の出入りで気づいたのは【**修眉**】だけをしにくる学生が多いことだ。やはり眉の形で目元がかわるし印象もかわることからだろう。ちなみに【**修眉**】は10元。どの国の女性も美の追究は変わらないようだ。勿論、さらに値段の高いコースをやっている中国人も多く見られた。来店者の年齢層も幅広く、下は大学生から上は50代までいる。高級感がたどよう日本のエステとは異なり、中国のエステはリラクゼーションと社交の場として楽しまれている。

そして私のここでの楽しみも小姐たちとのたわいない会話だった。私はエステ目的でなくても店の出入りをするを許され、客がいない時はテレビを見ながら、いろんな話をした。彼女たちは話好きで話題も豊富だった。彼女たちの恋愛話などを聞いたりして、中国の事情もいろいろ見えてきた。学校内にいる人々というのは、往々にして外国人の話し方に慣れており、多少間違っても流されてしまう。しかし、彼女たちは容赦なく、私はずいぶん鍛えられた。私の留学中の思い出の中でも、この小姐たちとの交流が一番印象深い。



これで女は生きかえる？

2. 实话实说 shíhuà shí shuō—テレビ出演

中国といえば人口13億の大国である。そんな中国のメディアの中核といえば、中国中央電視台(CCTV)である。最近の中国の番組を見ていると視聴者参加型番組が意外に多いのだが、その代表的な番組の一つである『**实话实说**』に参加する機会を得た。日本でも地方のテレビ局に行ったことはあったが、それとはスケールが全く異なる。初体験の中国中央電視台。わくわくしながらスタジオに向かった。すると示し合わせたわけではなかったが、日本人参加者の中には愛大生が自分も含めて4人もいたのだ。こんな偶然もあるのだと嬉しくなった。

収録は二本撮りで長丁場だった、この番組は司会者【**主持人**zhǔchí rén】とゲスト【**嘉宾**jiābīn】、そして一般参加の視聴者が、毎回テーマについて、議論するというもの。まじめでかつ面白い。とりあげるテーマも「【**世界杯**Shìjièbēi(ワールドカップ)】」「【**吉尼斯**Jínísi(ギネス)】」など様々。私たちが参加した時のテーマはデリケートな戦争に関するものだった。語学留学で中国に来たのだから、中国語で発言してもいいなと思いつつ、今回はテーマがテーマなので発言することになっても日本語でしようと心に決めていた。今回の聴衆は日中韓と三ヶ国そろっており、全員にイヤホンが渡され、私たちのために国家一級という通訳者が同時通訳者として控えていた。これには正直驚いた。なぜなら、日本でこの規模の同時通訳のつく視聴者参加型討論番組というのはあまり見たことがないからだ。日本の場合はスタジオに入れても、観客として入るだけで、発言する機会は少ない。しかしここでは完全な番組進行の一員として発言できる。仕込みなどもなかった。私も最終的に挙手をし、発言した。収録中はある意味何も感じることなく過ごしていたが、ことの大きさを感じたのは放映後のことである。「みたよ。」と学内の見知らぬ人に言われたのをはじめ、夏に行ったハルビンでも言われたのには中国の広さ、メディアのすごさを感じた。そしてそれは夏休み明けまで続いた。聞けば、この番組は中国では高視聴率とのこと。



テレビ局スタジオ前の廊下

3. 无偿献血(wúcháng xiànxuè) — 献血

北京は前門にある、献血車の中へおそるおそる進入。「やってみようかと思ったのですが、日本人でもいいですか。」「どうぞ、外国人の方もよくいらしゃいますよ。」とすんなりOK。まずは健康状態の問診、「全部読めますか。」と一つ一つの質問にチェックを入れていった。そして、名前や年齢、住所を記入し、血液型を調べた。使い捨ての小さな針で指をちくりと刺し、血を出して、血液型を調べた。信じていないわけではないが、一応「是一次性的吧? Shì yí cì xìng ba? (使い捨てですよ。)」と確認してしまった。その後、献血となるわけだが、そこでうけた待遇は手厚いものだった。「食事はちゃんと取りましたか。」「いいえ。」「じゃあ、これ食べてください。」とお菓子を渡され、献血の間も【白糖水báitángshuǐ (砂糖をお湯にとかしたもの)]を飲むようにと渡された。日本の献血でもお菓子や飲み物をもらえると聞いていたが、中国でもさほど変わらないのだと感心した。献血しながら、看護師さんたちと話をした。中国で献血はまだ誰でもというわけではないらしい。彼らの話によれば、南方は献血に対して幅広く受け入れられているが、北方ではまだ抵抗があるようで、気軽に立ち入るという雰囲気ではないらしい。さらに冬場になると献血の人数が格段に減るという話だ。理由は、夏は日も長く、仕事が引けた後に立ち寄ってくれる人がいるが、冬は日も短く、皆家路に急ぐため、少ないということからだ。

帰りには献血手帳は勿論のこと、さらに血液型のキーホルダー、献血の記念の楯までいただいた。献

血のみかえりがこんなに沢山の記念品になるとは思わなかった。

その後、学校に戻り、中国人の友人に献血の話をしたのだが、その反応に驚いた。それは、何でもまた献血なんてするのという不思議な目であった。彼女はまた「大丈夫なの?」「だるくない?」と心配してくれた。やはり、中国人にとっての献血というのはまだ普通のことではないようだ。そして彼女が私に差し出したのは【红糖水hóngtángshuǐ (黒砂糖をお湯にとかしたもの。)]だった。中国ではどうも貧血状態の人に砂糖水(実際はお湯)を飲ませる習慣があるようだ。

かつての中国も昔の日本のように売血といって、貧しい人が血を売ってお金を稼いでいた時代があったが、その後禁止となり、今ではいわばボランティアとして血液を提供するようになったのである。仲良しのおばさんによると、以前は職場から選ばれた人が献血をし、その人は名誉なことをしたということで、休養もかねて、一週間位の休みをもらえた時期があったらしい。



献血手帳と記念品

以上、私の体験した三つの話を紹介した。ここ10年で北京も大きく変化している。北京は2003年1月に【轻轨qīngguǐ (都市鉄道)]も全線開通して交通アクセスも便利になった。街の変化もめまぐるしいが、同時にそこに住む人のファッションやちょっとした考え方も変化していると感じた。発展も重要だが、古き良き北京の姿との共存を実現してもらいたい。

近頃タイの巷に流行るもの： タイの若者と携帯電話

タイ国立ナレースワン大学人文社会学部

アッチャラー・ウンタラクーン

昔から、タイでは、人の生活に必要なものを「四依 (ปัจจัย ๔: パッチャイ・シー)」といってきました。「四依」とは衣、食、住、業です。これ、生きていくうえで必要ですね。しかし現在、タイの若者は、「四依」に携帯電話をも加えてしまったようです。携帯電話が生活に必要不可欠なものになってきました。学校や会社に行くとき、財布や時計を忘れてしまったとしても、携帯電話だけは忘れないという人が増えてきました。携帯電話の会社も、常に新型の携帯電話を製造・販売し続けています。少し前の電話のように声で人と連絡するだけではなく、今では携帯電話でメールやラジオもできるそうですね。とても便利ですね。

数年前までは、携帯電話を持っている人は少なかったです。なぜかというものすごく高価なものでしたから。その頃まで、携帯電話を持っている人はとてもかっこよく、お金持ちの人だと思われていました。携帯電話を持っている人は、わざわざ大型の電話を腰にぶら下げて、人前で他の人に見せつけるように携帯電話を使っていました。最近では、携帯電話の値段は安くなって、携帯電話を持っている人も増えてきました。携帯電話を持っていると、いつでも、どこでも、誰とでも連絡できます。ですか

ら人々は携帯電話がほしくなりました。ある人は、携帯電話を持つために、一生懸命に仕事をして頑張ります。ある両親は、子供に携帯電話を買ってあげるために貯金しています。でも、ある人びとは、携帯電話を持つために、おかしいことをするようになりました。ニュースによれば、ある人は携帯電話を泥棒しました。ある女子大生は、携帯電話を買うお金を稼ぐために売春をしました。法律に違反する携帯電話を買う人もいます。両親に携帯電話を買ってもらえなかったので、自殺した子供もいました。大変悲しいニュースです。携帯電話は、いまや、社会問題にまでなってしまったようです。

忙しい社会人だけではなく、小学生から大学生まで、子供たちでも携帯電話を持っています。私も携帯電話は便利だと思いますけど、何か変です。授業中の教室の中でも、会議中の会議室でも携帯電話の音が鳴り響いて、他の人に迷惑かけてしまっている光景も目にします。これは、携帯電話自身の悪さというより、むしろ携帯電話を使う人のマナーの問題ですね。

先日、大学で大切な面接をしているとき、こんなことがありました。先生がある女の子に質問しているところに、女の子の携帯電話が鳴り始めました。さて、この女の子はどうしたでしょう？ 何と!! この女の子はかばんから携帯電話を取り出して友達と話し始めました。オイオイ! こんなに大切なときに、なんで友達からの携帯電話を受けちゃうわけ? 携帯電話のために人生捨てちゃうの?

この問題の原因は何でしょう? 携帯電話は、ただの機械なのに、なぜこの機械は人生の生活にこれほどまでに影響を与えるのでしょうか? 人間が機械である携帯電話を使うのではなく、機械である携帯

電話が人間を使うようになってしまったようです。技術の進歩は、世界中の人たちの生活に役に立つよいことだと思いますが、私たちは、どうやってこの機械を使うかについて、もっともっと考えていかなければいけないでしょうね。



2005年から携帯電話でテレビが見られるようになる!! 『タイラット』紙 (2003年7月15日)

台湾の巷で流行る日本

中国研究科博士後期課程

佐藤 一 樹

日本の大衆文化と台湾

昨今台湾では「哈日族」（日本の大衆文化を好む人々）などという言葉にも表れているように、街角やメディアには日本情報が溢れている。このように巷で日本情報が日常的に見られるようになった事により、台湾に対して日本の若者たちは、大陸と比べて比較的「親近感」を抱き易く、日台の若者は、その成長過程において少なからず共通の背景（大衆文化）を有していると言えよう。そこでここでは「台湾の巷で流行している日本」の幾つかを紹介したいと思う。

台湾若者言葉の変化

台湾の若者は日本のドラマやバラエティー番組をよく見ており、そうしたソフト（VCD）は「光華市場」と呼ばれる所で売られている（150元、約580円）。中国大陆では吹き替えが多かったが、台湾では字幕が主流であり、また日本語学習の一環として見ている人も少なくない。そうした影響と思われるが、近年日本の若者がよく使う、程度を表す副詞の「超」を、台湾の若者がそのまま使っている現象が見受けられる。私が耳にただけで「超可愛」（すごく可愛い）、「超麻煩」（すごく面倒）、「味道超好」（なんて美味しいの！）など。またシンガポール出身の人気歌手である孫燕姿には、「超快感」という曲もある。ここでの使われ方、言葉に含まれている概念が日本経由であると思う所以は、以前中国大陆で数年生活したが、「超」をこのように使った事も、聞いた事もなかったからである。そうした見地から、「超」は日本経由で入ってきた外来語であり、漢字ではあるが概念的には日本語に近いものと思う。こ

の一例は、日本の情報がリアルタイムで台湾に入り、それが台湾人の日常語に定着している事を示している。

日本観光ブーム

昨今の台湾では、こうした受動的な日本情報の流行だけではなく、日本観光という能動的なブームもある。これには日本、日本語に関心を抱く若者層が増加しているという背景があり、増加傾向の要因としては、街中に溢れている日本情報が彼らに関心を抱かせる作用を果たしていると考えられる。台湾は日本語学習者の比率が高いところである。駅前には「地球村」という、日本で言えば「NOVA」のようなどころがあるが、看板を見れば「日本語」、「英語」を掲げている。つまり台湾の日本語学習者は英語学習者と双璧を成す事を示している。そして現在、台湾人に人気の有る観光地は北海道である。理由として考えられる事は、南国にはない「冬」を体感できるからであろう。

南国でのブーツ姿

台湾の巷では日本のファッションが流行っており、特に女性のファッションは日本の影響を受けていると思う。台湾は沖縄より南に位置する「南国」である。台湾に着いた当初（3月）、すでに暑く感じ、最初の買い物が半袖シャツとサンダルだった私の目を釘付けにしたのは、若い女性のブーツ姿であった。恐らく南国育ちの彼女らと私とでは「体感温度」が違うので寒く感じるのであろう、と最初はそう理解していた。事実、台湾人は非常に寒がりである。しかし、初夏を感じさせる4月に入っても町でブーツ姿を見かけたので、室友（ルームメート）にその疑問を話したところ「日本のファッション雑誌の影響だろう」と言っていた。確かに年配の方は涼しそうな履物を穿いていたから、室友の言う通りだろうと思う一方で、さぞ蒸れるであろうと思った。中国語で水虫は「香港脚」とも言う。つまり蒸し暑い香港には水虫にかかっている人が多いという偏見？に由来するものであろう。今のところ、水虫を「台湾脚」と使う事はないが、南国でのブーツ姿を見る度に、

近いうちにこの言葉も辞書に加わるかも知れないと思った。

台湾マクドナルドの戦略

台湾には、いたる所に日本料理屋がある。日本人が経営するものから、日本に滞在した経験を持つ台湾人が経営するもの、また日本統治時代を経験した年配の方が経営するものまでと、その背景は様々である。台湾では、日本料理は「流行」しているものというよりは、「定着」していると言った方が的確だと思う。恐らくそこに目をつけた台湾マクドナルドは、2002年12月16日から日本風の定食(和風飯食)を販売し始めたのである。メニューは「泰風辛味鶏肉炒め」、「焼肉生姜風味」、「鶏腿ソースかけ」と「豚カツカレーソース」の四種類あり、ソフトドリンク付きで値段は129元(約490円)である。ちなみにこの値段はビックマックセットと同じである。台湾には日系のモスバーガーなどがあり、ライスバーガーなども販売している。つまり台湾マクドナルドは「定着」している日本料理に着目し、日本風定食が「流行る」と考えたのであろう。この戦略の結果がどうなったかは知らないが、日本マクドナルドも近いうちに、薄利多売から日本で「定着」している中華料理をメニューに取り入れ、「エビチリバーガー」などを発売するかも知れない。

台湾の中の日本、日本の中の台湾

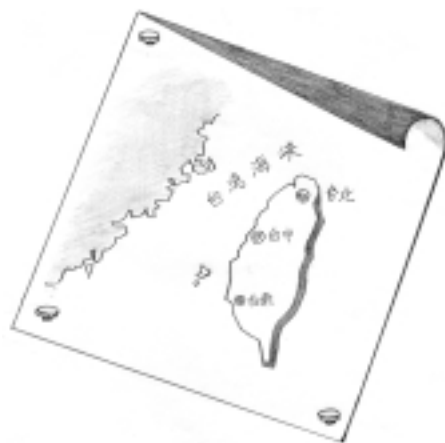
これらは台湾の巷で流行っている日本と関連する事象の一部分である。「流行」という現象は「一過性」的要素が強いが、「流行」からすでに「定着」しているものまである。そして「流行」が「定着」するには、台湾人の取捨選択の「過程」を経る。即ち、台湾の巷に溢れる日本の流行は、盲目的に日本の大衆文化を受け入れている訳ではない、という点は知っておくべきであろう。こうした「過程」に着目すれば、台湾社会、台湾人の日常生活の一端を知り得る手がかりになると思う。つまり、「台湾は日本のものが溢れている」、それは「日本に対して好感を抱いているから」という表層的な結論付けではなく、なぜ彼らが日本の「流行」を受け入れているか。

そしてなぜそれが「定着」していったのか。という背景も併せて考える事で、更に台湾という所を理解でき、また違った台湾像に迫れると思う。

この文章を書きながら思ったのは、日本の巷で流行っている「台湾」という事である。身近なものを一つとりあげると、大学北門の側には「台湾ラーメン」の店がある。この「台湾ラーメン」は愛知県で「流行」しているが、まだ全国区では「流行」していない。なぜ愛知県で流行しているのか。恐らく「味噌煮込みうどん」に見られるように、濃い味を好む県民性が台湾ラーメンの濃厚な味を好むのだろう。つまり台湾ラーメンは、日本人の取捨選択の「過程」を経て、濃い味を好む地で「流行」していると思える。

こうした台湾の中の日本、日本の中の台湾を意識し、双方向から物事を見る目を養う事が、「国際理解」に繋がると思う。双方向から見ると、当然「相手を理解」し、日本の尺度だけから物事をはからない、という態度が必要であるが、もう一方で「自国を理解」する必要もある。自国を知らないものが、海外でその地を理解できるとは思われたい、という点は知っておこう。

(2002年3月～2003年2月まで交換留学生として台湾師範大学歴史研究所博士班に在籍)



韓国の若者たちの 中国語学習ブーム

経済学部

李 泰 王

中国の「余白」は21世紀の新大陸

近年、韓国の若者たちは中国や中国語への興味を膨らませています。このような動向のきっかけは、言うまでもなく、中国の改革開放政策や十年ほど前の韓国と中国との国交正常化によるものであります。韓国と中国との断絶が半世紀近く続いていただけに、両国間の交流は予想を越えるテンポで進行してきました。このような実例として、ここでは韓国の早期語学学習の有様をソフトタッチで紹介したいと思います。

私は一昨年夏に、初めて北京とその周辺を廻って来ました。そのとき驚いたのは、広大な土地に対してでも、人口の数に対してでもありませんでした。中国社会における「満たされていないことの余白」の魅力が私の脳裏に映ってきたことでした。この発見は、日系企業の現地調査を通して拾いあげた、あくまでも直感的なものとはいえ、本題をバックアップする重要な手がかりになります。満たされていないことの「余白」とは無限の可能性を指しており、その可能性は生産の現場で確かに湧き出てきていました。「余白」は空間なので、強い吸引力を作り出すのだと私なりに整理しました。この「余白」は、いわゆる世界のレベルからみて成熟しているかそれを越えているもの、例えば、プロの人たちや先進企業などのカテゴリーには新しい活動のフィールドを与えるでしょう。他方、その水準に達していないかもしくは比較的弱体なもの、例えば、若者たちや中小企業などのカテゴリーには、夢を実現するプロセスを提供しているようです。その意味で中国というのは、広くて多彩な希望を叶わせてくれる最高の土地かも知れません。

さて、この4つのカテゴリーのなかで、若者たちの行動パターンに私は注目しています。中国社会のこのような「余白」に、韓国の若者たち、とりわけ幼い小中高の学生たちがどのように魅了されてきたのかを考えなければなりません。年々、若者たちが「余白」の無さそうな日本（語）から中国（語）へ関心を移し始めています。早期の語学学習の問題がその一例といえます。

中国語に及ぶ早期語学学習ブーム

韓国社会は、工業化の一段落を完成させたとされる九十年代にはいると、日本のような成熟社会になったせいか、制度や組織の疲労が溜まり、数多くの問題を露呈しました。周知の通り、失業者が増えるとか、過剰生産のため先ず中小企業が倒産にさらされるとかの経済事情の裏面に、全人的教育が、かつてなかった隘路に直面することになりました。韓国では多彩な人材育成の方向とは逆行する異常な教育風潮が現れてきたのです。加熱する子弟教育、世界最高水準の大学進学率などの記録は、副作用の兆候を表現するものでした。高等教育の普及の果てに生じた汎用人材の過剰が、今や教育現場に陰りを落としていたのです。過去なら人材立国の源だったはずの、親たちの子供への熱心な教育投資が、社会問題になるケースが少なくありませんでした。

アメリカやカナダ、そしてオーストラリアなどの英語圏に金持ちの親をもつ幼い子供が、無理に連れていかれました。良好な成果を収めた人とそうでない人などのデータは確認していないので、何ともいえませんが、この流行に今度は中国語学習ブームが加わりました。これは中国の「余白」に嵌っていく「ゴー・チャイナ」ブームの一環であることが分かります。

巨大企業も中小企業も、プロの人もアマチュアの若者たちも、一度は中国での成功を夢見ていたと思われます。このような現象は先にも触れたように、すぐに親たちの教育方針に反映されました。出世への近道はチャイナ・スクールへの仲間入り、したがって中国語留学、といった図式が親たちの焦りを増していきました。当然語学力だけで出世を保証さ

れる社会はないと思いますが、正攻法ではとても勝てそうもない我が子にすら親の思いは限りないわけで、これを非難することもできませんし、また賞賛も控えなければなりません。親の判断で駆り立てられ中国に送られた若者たちでさえ、当の「余白」で異文化の体験を積んで帰ってくるからでしょう。

「ゴー・チャイナ」は若者たちの新座標か

それでは韓国の若者たちの対中国意識について幾つか考えてみましょう。ことばのジャンルでは、まづハングルの特殊性を挙げることができます。私が日本でよく遭遇する周りからの答えにくい質問に、「韓国の若い世代は漢字が読めない」、または、「漢字をしっかりと教えていないからこれから大変じゃない」といったものがあります。なぜかという、漢字を先に教え、次に中国語を教えれば、比較的容易に中国語を学習できるという理屈でした。しかし、漢字なしではことばの意味をとらえたい日本語と違って、ハングルは表音文字なので、日本語のように中間過程の漢字習熟をパスして、ダイレクトに音声言語としての中国語に接することができます。つまり、韓国の若者たちの方が、日本の若者たちと比べて、逆により早く中国語の習得ができるかも知れないのです。しかし、この真偽に関する裏づけは、専門家や読者の判断にお任せしなければなりません。

次に考えられるのは、若者たちの思考様式の自己完結性です。冒頭で言及した半世紀近くの中国との断絶は若者たちには大した支障を及ぼしていませんでしたし、中国語への欲求にしても国民党・台湾を通してある程度までは解消してきた、という事実が重要ではないかと思います。精神的・物質的な「余分」ゆえに、彼らにとって中国社会における「余白」は、青春とロマンを満喫する絶好の場になっているように見えます。つまり、急速な韓・中両国の接近は、水面下で膨らんできた知的、物質的な欲求の瞬間浸透に他ありませんでした。

他方で、今度は中国の若者たちの韓国への関心を付け加えなければなりません。中国で韓国の大衆芸能文化が「韓流」の名で芽吹き、流行っていることは面白い現象といえます。中国若者たちのオープン

な趣向は、新たな「余白」を創造しているに違いありません。中国若者たちの「余白」は、韓国や日本の若者たちの「余分」とお互いに上手く結び付いていくようにもみえます。近い将来、中国の若者たちのハングル学習ブームが、朝鮮半島の新しい「余白」のなかで出てくると思います。ことばも音楽も芸術も、みな理解と共存に役立つ合言葉だからなのです

到達点は真心のコミュニケーション

以上で私は、途上国社会の所得格差やインフラの未整備など経済問題ばかりに眼を奪われることを拒み、中国社会の長閑な余裕を人間のかつ知的発展の「余白」として捉えてきました。この「余白」が、自己満足のために中国のことを巧妙に利用しようとするプロたちや進んだ企業の惰性を克服しうる、いわば若者たちの新しいテリトリーになることを願って、ことばの国際伝播の意義を謳ったしだいです。ここでは韓国の若者たちの時代像を断面的にしか描けませんでした、中国語や英語などの早期語学学習ブームの問題が、従来の学校教育を抜本的に見直す契機になっていることを忘れてはなりません。韓国と中国、そして日本の若者たち同士のコミュニケーションは、「余白」と「余分」の共鳴を土台にして着実に進んでいます。私の言う「余白」、なかでも、ことばの「余白」の魅力が、壊されず、こんこんと湧き出てほしいものです。(終)



天津汽车有限公司(2001年8月)

(帽子の人)筆者

このごろ巷で流行るもの： ロシア・モスクワ編

～イヂョーット ヴ モーチェ～

経済学部

清水 伸 子

ロシア語では、「流行っている」は“イヂョーット ヴ モーチェ”と言い、「モードの中に行く」という意味の表現を用いる。では、今ロシアでは何が“イヂョーチェ”なのか。本題に入る前に述べておかなければならないのは、現在、首都モスクワは、空前の好景気に沸いているということである。その好景気ぶりは、わずか5年前の1998年に金融危機に陥った国とは思えないほどである。

景気が良くなり、実質の平均月収がこの5年で2倍ほどに増えた（400ドル～500ドル）結果、携帯電話やパソコンを持つ人も増え（私の印象では、携帯電話の普及率は学生の4人に1人ぐらい、パソコン所有率は学生の3人に1人ぐらい）、金回りの良い男の人たちはきれいな車に乗り、女の子はファッションにお金をかけ、髪を染めている。ちなみに、女の子のファッションでは、ここ1～2年は細身のパンツルックが流行り、夏はこれにヘソ出しピタピタTシャツ、冬は毛皮のロングコートに毛皮の帽子という出で立ちである。2年前に偶然知り合いになった23歳のロシア人女性いわく、今や『毛皮は女性の必需品』ということらしい。また、女性の間では、髪を金髪か赤毛に染めるのが流行っている。ヘアカラーが流行している関係で、店頭ではビールの香りやスイカの香りといった日本ではありえないヘアケア商品に至るまで大変な品揃えで、花の香りのコンディショナーより売れているのがロシアの流行の不思議なところである。

また、ロシアできれいな車が増えたということは、実はいろいろなことを意味している。たとえば、金融危機のあった1998年頃は、前年およびその前々年度は一種のバブルの様相を呈していたのだが、まだまだモスクワには、形が古くあちこち錆びてドロと

埃でフロントガラスが曇ったぼろぼろの車が多かった。いや、ロシア人憧れの三菱パジェロやベンツでさえも、うっすら白く粉を吹いたように埃まみれで走っていたのである。『高い車に乗ってるんだからさあ～、洗車ぐらいしろよ～』とよく思ったものである。しかし、実は、この頃のロシア人には、洗車するという感覚自体がほとんど無かったといってよい。雨が降ると大きな水溜りが出来る道路で、かつ冬には頻繁に雪が降るような土地柄では、車はすぐ汚れてしまうので、ロシア人にとって洗車は労力の無駄という感覚しかなく、車は汚れていても構わないものだったのである。従って、「きれいな車が増えた」ということは、人々に「きれいな車」を買う余裕が出来てきたと同時に、道路事情も良くなり、車に対する考え方が変わり、洗車場が商売として成り立つようになったことを意味している。

携帯電話、車、かつファッションにもお金をかけられるようになると、次は『主婦の夢である3種の神器』の洗濯機、掃除機、電子レンジを購入し（テレビ買い換えのピークは過ぎたように思う）、その次に目指すのがマンションのリハウスであろう。もちろん、建設業界も元気があり、新しい巨大マンションが建設され分譲されているが、そういったモスクワの新築マンションの値段は、バブル期の東京の新築マンションの値段と変わらない。そういうマンションを買える人は、常にボディガードを雇っているような（または、実のところ、雇わなければ命が危ないほどの）超大金持ちである。であるから、「金回りが良い」ぐらいの人は、中古で購入したマンションや元々所有していたマンションをリハウスするのである。システムキッチンや床暖房を入れるということも珍しくないが、ソ連邦時代のマンションは台所や洗面所兼お風呂場が狭いため、かなりの資金を用意して、廊下の壁を取り払って部屋や浴室を広くするという大々的なリハウスを行うことが流行している。しかし、私はある時、聞いてしまったのだ。自宅をリハウス中のロシア人の夫を持つ日本人女性の素朴な疑問を。「この壁、マンションの構造上必要な壁らしいけど、抜いちゃって大丈夫かしら…」“クダー イヂョーット！（どこへ向かってるんだー。）” 恐るべし、ロシアのリハウスである。

私の外国語修業時代

経済学部

湯川 治 敏

上記のタイトルで執筆依頼があったものの、まずお断りしておかなければならないのは僕自身まだまだ「修行中」という事です。本来ならば修行を終え、免許皆伝された方々がそれぞれの修業時代を振り返り、言語習得に関するアドバイスやヒントを...という趣旨でしょうが、先ほど記したように僕はまだまだその域に達しておらず、非常に心苦しく感じているのが本音です。しかし、折角頂いた機会なので昨年8月まで2年間、カナダのバンクーバー近郊で海外研修させて頂いた経験談を少し紹介したいと思います。

HalとHaru

僕のファーストネームは「Harutoshi」であり、これは英語圏の人にとっては長いし、読みにくいし、覚えにくいと思い、当初から最初の2音だけを使って「ハル」と呼ばれるように自己紹介でもそのようにしていました。しかし、実際はそのような理由以外でも僕は以前から自分のスクリーンネーム等として「Hal」を使っていました。もちろん自分の名前に忠実に再現すれば「Haru」なのですが、「ru」ではなく「l」を意識的に使っていました。理由は「2001年宇宙の旅」です。皆さんはこの有名な映画をご存じでしょうか？SF界の巨匠アーサー・C・クラークの原作で、スタンリー・キューブリック監督作品（1968年）です。この中に出てくる知能を持ったコンピュータがHAL9000です。内容は一言では語りきれないので興味のある方は調べてみてください。とにかく、実在したわけでもないのに非常に有名なコンピュータの名前で、結構いろんな人、特にコンピュータ関係の人はこの名前を使いたがります。少し話が逸れたので元に戻すと、日本語では「Hal」

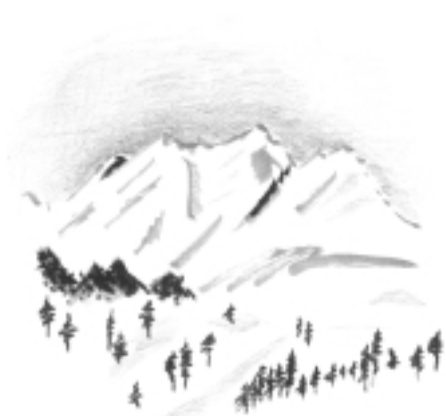
も「Haru」も「ハル」と読めますので問題ないだろうと思ったわけです。つまり日本人は「l」と「r」の区別をしない、と言いますか、することを意識していないのです。僕の考え方も全くその通りでした。しかし現実には明らかな違いがあることを痛感させられました。「l」の発音ではちゃんと舌の先を上前歯の裏にくっつけ、逆に「r」の音は舌を奥に引っ込める。こんな事は多分中学校で習っていることなのでしょうけど、今まで全く意識したこともなかった事でした。さらに日本に帰ってきてから気づいたことなのですが、SKY PerfecTVの中で子供向けに「Dora the Explorer」という番組を放映しています。これは娘がカナダでも見ていた番組なので日本に帰ってきてからもよく見ているのですが、番組は非常に単純でコケージの母とメキシカンを持つDoraが英語とスペイン語を勉強しながらいろんな冒険をします。番組はアニメなのですが、よくよく見ると会話中の単語に「l」があると、Doraの口の中に舌が見え、ちゃんと上前歯の後にあてているのがわかります。これくらい注意し、意識もしているのか、と非常に驚いたものです。

Healthy Cloud?

カナダと言えば「大自然」を連想する人が多いかと思います。我が家もご多分に漏れずアウトドア大好き家族です。夏の間のロング・ウィークエンドにはいろいろなキャンプサイトに出かけました。その中でカナダ人のご家族と一緒にモーターホームでカナディアン・ロッキーの麓まで出かける機会がありました。モーターホームの運転手は常に奥さんです。というのも、ご主人はほとんど全盲に近い状態だからです。移動の間、ご主人といろいろな話をしながら過ごしたのですが、その中の一コマです。その年はカナダの7月にしては晴天率が悪く、折角キャンプに出かけても常に天気心配をしなければいけない状態でした。移動の最中も同じで常にラジオでチェックしながら、周りの天気を気にしながら、という状況でした。僕はご主人から「外の天気はどう？」と聞かれたので、「そんなに悪くはないですよ。雲はありますがそれほど厚い雲ではありません。」

という意味の事を言ったつもりだったのですが、そのご主人はニヤニヤしながら「それはいいね。健康な雲があるんですね。」僕「???」。判りますか？僕は英語でこのような雲の表現が適切かどうか知らないのですが、「厚い雲」という意味で「thick」という単語を使ったのですが、ご主人は「sick」と捉えたわけです。これも日本人が陥りやすい発音の問題点ですね。僕もこのことがあってから非常に気になってきたし、意識的に気を付けているようにしています。ただ、実際にできているかどうかというと判りませんけど...

以上、音についての2つの話を紹介させて頂きましたが、いずれも英語圏に住んでいないとなかなか実感できない事柄だと痛感させられました。逆に、子供は何の抵抗もなくこれらの違いを吸収しています。やはり言語習得はできるだけ若いうちに刺激を与えた方がいいんだなあ、と思ったことも事実です。



漱石の外国語教育論

経済学部

葛 谷 登

一八九二（明治二十五）年、漱石は二十六歳の時、「中学改良策」という文章を書いています。彼は一八九〇年、二十四歳の時に第一高等学校を卒業し、同年、東京帝大の英文科に入り、一八九三年（明治二十六年）、二十七歳の時に卒業したのですから、これは大学在学中に手がけた論文と見えます（因みに松山中学に赴任したのはその二年後の二十九歳の時）。以下暫く窺いてみることにしましょう。

「尊皇攘夷の徒、海港封鎖の説を豹変して貳千五百年の靈境を開き、所謂碧眼児の渡来を許したるは、既に廿五年の昔なり。」

と文章は始まります。

「外交の約一たび成つてより、日本は無事の日本にあらず。競争の世界に自立して列邦の間に連鑣馳騁せんには、其丈の用意なかるべからず。」

ここでグローバリズムの漫延する現代日本社会と見紛うような当時の熾烈な国際競争へ準備万端ぬかりなきようにと訴えています。

「世界の有様が今のままで続かん限りは、国家主義の教育は断然廃すべからず。況して吾邦の如き憐れなる境界に居る国に取つては、益此主義を拡張すべし。之を拡張して尤も功驗あるは中学校に若くなし。」

自国の権益ばかり主張するエゴイスティックな国際社会で明治の日本が生き抜くには国家主義の教育をしなければならず、それを担当するのは中等教育機関が相応しいということです。

この国家主義的教育の要（かなめ）である中等教育機関での外国語教育はどうあるべきなのでしょう。そもそも日本人にとって西洋の外国語を学ぶことはどういうことなのでしょう。

「元来西洋諸国は同一の宗教を有し、同一の衣食同一の風俗を保ち、其国語の組織も大抵似よる故、己れの国語より他の国語に移るは東京

人が薩摩語を修するよりも容易なる事なれど、日本と西洋とは風俗習慣より其言語の構造に至つて截然として別物なる故、吾人が西洋語を学ぶには非常の困難を感じるなり。然るに此外国語の智識は學問を修するに當つて只一の器械なれば、是非共是に通曉せざるべからず。」

西洋人が西洋の外国語を学ぶのは、東京の人間が鹿児島の方言を学ぶより簡単。日本人が西洋の言語を学ぶのは習慣も異なるので至難の業とはいえ、知識獲得の有効な手段としてとにかく、泣く泣く勉強するしか道がないと述べます。

では漱石は具体的に外国語教育をどのように考えていたのか、二、三例を挙げてみましょう。

「用書は可成卑近のものを択んで高尚に失せざる様、心掛くべし。」

テキストは難し過ぎないほうが良いのです。生徒は虚栄心が強く、教師は力量に欠けるから高尚難解なテキストは用に供さないというわけです。

『『猿が手を持つ』杯（など）といふ言は、六歳前後の小児には多少の興味あるにせよ、十四、五歳の学童には面白き筈なく、且つ人物養成の点に於て一毫の裨益なきなり。故に中学にて用ふる読本には可成（かなり）注意して、生徒の学齡に應じたる丈の道德的智識的に有益なる事柄を記載せるものを択むべし。』

しかし頭の痛くなるテキストもいけないが、「猿が手を持つ」という知的レベルの低すぎるテキストも門前払いなわけです。

「仮令（たと）語学の稽古なりとて、日本従来の徳義と衝突する様な本を講読して平気なときは、生徒は何時しか書中の思想に感化せられ、遂には日本人の胴に西洋人の首がつきたる如き化物を養成するに至るべし。」

内容が日本の伝統的倫理と衝突するようなものも駄目、もしそうしたテキストを使用すれば、生徒はスフィンクスの如き怪物～胴体が日本人で頭が西洋人～になると警告します。

「余、嘗てある私立学校に出席して英詩を講読せしに、詩中には日本人として云ふに忍びざるの言辞を翻訳せねばならぬ場面ありて、独り赤面せる事あり。」

愛だの、恋だのという際どい内容のものは一人で

悠然と楽しむのが好い。酩酊然と顔を赤らめ生徒に説明するには適當ではないわけです。漱石の顔を赤らめた様がほほ笑ましくも想像されます。

つまるところ、彼は外国語教育をそれ自身で閉じた世界の中で考えようとはしないようです。

「漢文国語及び日本支那歴史は、日本人の道德を堅固にするに必要なれば、教師は其辺に注意して授業の際、其科目の智識を拡ぐると同時に生徒の道德心を鼓舞する様注意し、兼て興味を加へて生徒に自修の念を起さしむべし。」

西洋の外国語に習熟するだけでは充分ではない。

日本人としてのアイデンティティー確立のためには、漢文や国文、更にまた中国史や日本史にも通曉しなくてはならないのです。西洋語教育には東洋の思想と言語に関する教育が絶対不可欠だと言うのです。

「憾む所のものは、日本に国民を代表すべき程の文学なきにあれど、或る点に於ては却つて西洋の文字よりも人間を高尚優美にする者なきにあらず。且つ俳諧の如き、日本只一の文字にして、而も平民的の文学なれば、是非共生徒をして其一斑を窺はしむべし。」

そこで日本人としての素養を身につけ深めたいところだが、残念ながら日本には国民文学というものがない。お手上げと言いたいところだが、俳句という西洋文学に勝って人間の心を豊かに耕してくれる庶民文学が日本にはある。日本の若き学徒にはぜひとも俳句に親しんでもらいたい、というのです。子規との交友の深さを彷彿させる漱石ならではの卓見ではありませんか。

以上、はなはだ多岐に亘る漱石の外国語教育論について、独断と偏見をもってつまみ食いのに且つ尻切れとんぼ風に素描を試みました。漱石先生も粗笨に紹介されるのは、迷惑不本意のことでありましょう。篤学の士には岩波『漱石全集』（第十二巻 初期の文章及詩歌俳句）をじかに手に取って漱石先生の卓見に触れていただきたく願うところです。

ともあれ如上の論文は日本が帝国主義列強の仲間入りを果たした日清戦争のちょうど二年前に書かれており、国家主義的教育を明々白々に肯定するあたり、不羈奔放の硬骨漢、夏目金之助も時代の子であったことが窺い知られて、興味深いものがあります。

日本語教育と私の教授法

非常勤講師（日本語担当）

梅 木 陽 子

私が日本語教育に携わるようになってから、6年目になる。愛知大学では平成14年度から学部留学生対象の日本語科目を担当している。

現在のような日本語教育の歴史は、日本における他の外国語教育の歴史よりも浅いが、日本語教育学会は1977年に発足している。大学の外で、「日本語を外国人に教えるのが仕事です。」という、様々な反応が返ってくる。「おもしろそうな仕事ですね。」という人もいれば、「そんな仕事があるの。」と驚く人もいる。この「そんな仕事」と言う表現には、次のような疑問が込められているように思われる。それは「日本で、『日本語』を教えることが仕事になるのか。」という疑問である。「外国人が日本で普通に生活していれば、誰でも自然に日本語が上手になるはずだ。」とか、「日本人なら誰でも日本語を教えられるはずだ。」と考えるから、「日本語教師?! そんな仕事があるの。」と言いたくなるのだろう。

このような考えは、日本人が外国語を学ぶ場合には、裏返しの表現となって現れる。すなわち、「その言語が話されているところに留学すれば、きっとペラペラになって帰ってくるはずだ。」「その言語のネイティブ・スピーカーなら、どんな質問にも答えられるはずだ。」となる。しかし、実際には、このような考えが言語習得の近道につながるとはかぎらない。むしろ、妨げるおそれがある。それはなぜなのか、ここで考えてみたい。

まず、「外国人が日本で普通に生活していれば、自然に日本語が上手になるはずだ。」という考えについて吟味してみよう。確かに日本で生活しているうちに、勉強らしい勉強もしないまま日本語が上達しているように見える人もいる。愛知県は製造業が盛んで、就労ビザを持つ南米出身の人が多く工場な

どで働いている。工場で働いている人はまさしく「日本で普通に生活している」わけだが、「おはよう」「ありがとう」など最低限の挨拶だけで何年も日本にいる人も少なくない。また、かなり日本語で意思疎通をはかることができるように見える人であっても、よく観察してみると、実際にはいくつかの決まり文句や便利な表現のパターンを持っていて、それらを組み合わせているだけであることが多い。

工場で仕事をしながら、教室で日本語を全く勉強したことがなく、日常生活だけで日本語を身につけた外国人と、日本語を教室で体系的に学んだ留学生の日本語力を分析して、比較する小規模な調査を大学院生のときに行なったことがある。その結果、どのように日本語を学んだかによって違いが生じることがわかった。

最も大きな違いは助詞の用法である。留学生の話す日本語で使われる助詞は「は」「が」「を」「も」「に」「で」「から」「まで」のような格助詞が大部分を占め、「ね」「よ」のような終助詞は多くなかった。ところが、日常生活だけで日本語を身につけた外国人は格助詞をあまり使わず、かわりに終助詞の「ね」を使いすぎる傾向があった。

留学生が受ける体系的な日本語の授業では、助詞の用法は学習項目として重要なものと位置付けられている。初級で基本的な用法をしっかりと理解したあと、段階を経て、日常会話に見られる助詞の省略を学ぶ。体系的な日本語教育の場では、省略された格助詞は「存在するけれども、隠れている。」という扱いである。ところが、日常生活の中で日本語を身につけた外国人にとって、格助詞は初めから「存在しないもの」になる。なぜなら、日本語の日常会話では格助詞が省略されることがあるため、日本人の話し言葉を見本にしている外国人には、格助詞が見えないからだ。「空腹」をあらわすには「オナカヘッタ」といえばいいのであって、「オナカ」「ヘッタ」と二つの単語に分析する必要はない。まして、「オナカ」と「ヘッタ」の間に「ガ」という助詞が本当は隠れているのだなどと考える必要もない。

外国人が日本に滞在する理由や目的はさまざまだから、生活するために必要最低限の日本語だけを身

につければ十分だという考えは間違っていない。しかし、「外国人が日本で普通に生活していれば、自然に日本語が上手になる。」というのは、正しくない。多くの場合は、日本で生活するために必要な日本語を覚えるにすぎない。まして、留学生は日常生活を送るための日本語だけでは不十分で、自己表現の道具、学習や研究活動の道具として日本語が十分に使いこなせるレベルに達しなければならないだろう。すでに成人に達している留学生は、子供のように無意識に言語を習得できない。日本語の難しい学習項目の一つに授受動詞（「やりもらい」動詞とも言う。）がある。「本をあげる。」「本をもらう。」「本をくれる。」という三つの動詞文に対して、日本人なら「誰が誰に」を間違えることはない。しかし、外国人がこれら三つの動詞を正確に使い分けるのは容易ではない。日本人が無意識に行なっている語句や表現の使い分けは、意識的に学習しなければ身につかないものだからだ。

では、「日本人なら誰でも日本語を教えられるはずだ。」という思い込みについては、どう考えるべきか。どんな言語のネイティブ・スピーカー（母語話者）でも言語的な直感に基づいて、「この言い方は自然だ。」あるいは「こんな表現はしない。」とは言える。つまり、外国人の言ったことや書いたことが許容されるかどうかは答えられる。しかし、「晴れたら、気分がいい（正）」、「晴れると、気分がいい（正）」はどちらも文法的に正しいのに、「晴れたら、海に行こう（正）」が正しくて、「晴れると、海に行こう（誤）」が正しくないのはどのような規則があるのか、具体的に示せるかとなると、誰でもできるとは言えない。「この表現は英語の-----とどいたい同じ意味だ。」と答えようとしても、「晴れたら」「晴れると」の例は、英語の“if”、“when”の枠組みで説明がつかない。やはり「日本語」を客観的に整理し、分析することが必要なのだ。

そうなると、「日本人なら誰でも日本語を教えられるはずだ。」という考えも正しくないとと言える。日本人が外国語を学ぶときでも、その言語のネイティブ・スピーカーに教えてもらえることは限られ

る。その言語のネイティブ・スピーカーが誰でも答えられるのは、外国人の言ったことや書いたものが自然かどうかということだけなので、込み入った質問をしたいときには、相手を選ばなければならない。自分の言ったことや書いたものがよいかどうか知りたいだけなら、子供に聞いてもよいのである。更に突き詰めれば、学習者が学んでいる言語に熟達し、教え方にも精通している人なら、ネイティブ・スピーカーでなくてもよい。その言語のポイントが何か分かっている人であればという意味においてのみ、誰でもよいのだ。

このように考えると、「外国人が日本で普通に生活していれば、誰でも自然に日本語が上手になるはずだ。」「日本人なら誰でも日本語を教えられるはずだ。」という考えが正しくないということが分かる。したがって、「日本で『日本語』を教えるという仕事」が存在してもおかしくない。

私が授業で心がけているのは、日本で学ぶ留学生にとって、習得しにくいと思われる日本語のある部分を取り上げることである。そのある部分とは、発音、語彙、文法、段落構成、文章構成などで、クラスの目標やその日の授業計画によって異なる。日本語の授業でしか扱われないものを取り上げ、それらが一人一人の学生の日本語の中に取り込まれるようにすることを第一に考えている。そのために、日本語を客観的に分析し、学生の習熟度と運用能力に合った方法で学習項目を提示し、習得につながるような練習をさせることが最も重要なのだ。

以上のようなことを念頭において、私は日本語の授業に取り組んでいる。



中国映画への招待 マルチタレント・ 姜文 (ジャン・ウェン)

現代中国学部

藤 森 猛

二人の“天才”

中国は WTO (世界貿易組織) 加盟を実現した米中交渉の中で、94年以来、アメリカ映画の大作10本の輸入措置をとり、現在は年間50本までのハリウッド映画 (好萊塢電影) の輸入を認める段階にきている。98年には『タイタニック』(泰坦尼克号) が空前のヒットとなり、『グラディエーター』(角斗士)、『ダイナソー』(恐竜)、『パールハーバー』(珍珠港) などの話題作もそれに続き、現在、アメリカ映画が中国の映画マーケットを席卷している。

一方、こうした米国映画の影響の中で、世界的に注目を集めている2人の映画人が、中国映画界を牽引している。張芸謀 (ジャン・イーモウ) と姜文 (ジャン・ウェン) である。張芸謀は北京電影学院・撮影科出身の第五世代監督であり、『一人と八人』(一个和八个)・『黄色い大地』(黄土地) などの撮影作品、『古井戸』(老井) などの主演作品、『紅いコーリャン』(紅高粱)・『あの子を探して』(一个都不能少)・『初恋のきた道』(我的父亲母亲) などの監督作品でわが国でも多くのファンを持つ。また2002年の監督作品『HERO』(英雄) では圧倒的な存在感を示している。

もう一人の天才肌の映画人が中央戲劇学院・俳優科出身の姜文である。『芙蓉鎮』・『春桃』で劉曉慶 (リュウ・シャオチン) と共演し、『紅いコーリャン』で鞏俐 (コン・リー) と共演して、人気・演技力とも中国男優ナンバーワンとなった。

声優作品『宝蓮灯』

中国アニメーション映画は、80年代からわが国の『鉄腕アトム』(鉄臂阿童木)、『ドラえもん』(机器

猫) などのテレビアニメの影響を受け、『黒猫警長』や『ひょうたん兄弟』(葫芦兄弟) などのシリーズアニメ映画のヒット作を生んでいる。また90年代以降は、主として日本のコミック本の『スラムダンク』(籃球飛人)、『ドラゴンボール』(龍珠二世) や宮崎駿の『もののけ姫』(魔法公主) などの劇場アニメの影響を受け、さらに中国アニメは進化している。

99年8月、アニメ映画『宝蓮灯』(常光希監督) が中国で大きな話題となった。このアニメは制作費がアニメでは破格の1200万元 (約2億円) であり、また作品としては『西遊記』を題材としながらも、日本アニメとディズニーアニメの影響を強く受けている。この作品の悪役「二郎神」役の吹替えに、姜文が起用されている。姜文の低音で“どす”のきいた声は迫力あふれ、また「二郎神」というアニメキャラクターは、姜文自身の強い希望により、目や眉などの輪郭を姜文そっくりに仕上げられた。

私自身はこの作品を99年夏、北京の映画館で初めて見た。第一印象としては、姜文扮する「二郎神」は、日本のテレビアニメ『宇宙戦艦ヤマト』のデスラー将軍そのものに脚色されているような気がした。また人気女優の寧靜 (ニン・ジン) が華麗な「嘎妹」役の吹替えをやり、姜文との対照的なコントラストが面白かった。



米国映画『グラディエーター』の看板(上海市)



中国映画『宝蓮灯』の看板(北京市)

監督作品『鬼子来了!』

93年、姜文は初の監督作品『太陽の少年』（阳光灿烂的日子）を制作した。主演には姜文の青年時代の風貌をもつ夏雨（シア・ユイ）を起用し、その恋人役には寧靜を起用した。王朔（ワン・シュオ）原作の文革時代の青少年物語を、姜文は輝かしく回顧する作品に仕上げた。

2000年、姜文は第2作監督作品『鬼が来た!』（鬼子来了）を制作した。タイトルの「鬼子（ゲイ・ズ）」とは、抗日战争（十五年戦争）中、中国の人々が日本兵や日本人を罵る言葉であり、映画の原題は「（日本兵の）奴らが来た」である。この映画には、袋に入れられたまま捕虜となった日本兵（香川照之）と中国の農民マー・ダーサン（姜文）の人間ドラマが描かれている。

またこの作品の舞台は河北省唐山であるので、中国語の言い回しには方言が多い。また映画タイトルをはじめとして、セリフの中に多くの罵声語がちりばめられ、作品が真実味あふれるドラマとして、時にはコメディとして仕上げられている。“ばか野郎・畜生め!”（王八蛋）、“石頭!”（猪脑袋）、“恥知らず”（不要脸）、“くそったれ”（妈拉个巴子）などの言葉が、次々と飛び交い、村人が本音で罵り、歓喜の声をあげ、悲しみに泣き叫ぶのである。圧巻は香川照之扮する日本兵花屋小三郎が命乞いのために言った中国語である。このシーンは是非映画作品の中で見ていただきたい。

主演作品『尋槍』

姜文は90年代以降、『黒い雪の年』（本命年）、『クールダウン』（有话好好说）や『ニューヨークの北京人』（北京人在纽约）などテレビドラマ出演の中で俳優としての新境地を開いた。

2001年、陸川（ルー・チュアン）監督により、姜文主演の新作『（原題）拳銃を捜せ』（寻枪）が制作された。姜文の役柄は妻子のある人民警察官（マー・シャン）であり、ある朝、マー・シャンは自らのピストルを紛失してしまうところからドラマが始まる。またかつての初恋の相手に扮するのが寧靜である。舞台は貴州省の大関冲などで行われ、中国語としては貴州方言がかなり強い。また作品としては、非常にテンポがあるのと同時に、コミカルな部分も多く、また姜文の「ショーン・コネリー」的なタフで憎めない役柄がみものである。

これらの作品のうち、『拳銃を捜せ』などは日本の劇場において未公開であるが、作品はVCDあるいはDVDで中国書籍販売店において市販されている。

なお中国映画については、愛知大学現代中国学部編『ハンドブック 現代中国』あるむ（2003年10月）を参照してください。



スイス ～ツアーコン体験談～

文学部4年（現役 ツアーコンダクター）

安 田 淳 子

「とうとう来てしまった。」雲の切れ間から、チューリッヒの街並みが見えた時の緊張感を今でもよく覚えている。

1996年7月。初めてのスイス訪問は15名の旅行者のツアーコンダクターとしてだった。

幼少の頃、「アルプスの少女ハイジ」の絵本に出会って以来ずっと、私はスイスに憧れてきた。そして短大卒業後、迷わず旅行会社への就職を希望。動機は単純で、ツアーコンダクターになればただでスイスへいけると思ったからだ。長年の夢に向かって、ツアーコンに必須の英語力を半年間のニュージーランド語学研修で補い、1年遅れで無事に豊橋市内の旅行会社に採用された。

社会人1年目。期待とは裏腹に、バスガイドとしてバスに乗務し、愛知県近隣の名所・旧跡をひたすら案内。時にはカラオケの司会を務めることもあった。

2年目に入ると、ようやくマイクから解放され、添乗員としての業務を開始。旅行地も遠くなり、北海道から沖縄まで様々な土地を訪れた。しかし、まだパスポートを使用するチャンスには恵まれなかった。

そして入社3年目。40名のツアー客を率いて、オーストラリアへ初の海外添乗へ。その後、タイ、シンガポール、中国などを訪れた。初めて訪れる国でさえ、何度も渡航し、その国の状況を知り尽くしているような顔をして案内しなければならないこの仕事の難しさを毎回思い知らされた。

一般的にツアーには2種類あり、社員旅行などのいわゆる団体手配旅行と、旅行会社が旅の企画をし、ツアー客を募集する主催旅行がある。後者のツアーの添乗業務を行う場合、国内外を問わず、「旅程管理者」の資格が必要となる。この資格は、旅行会社に勤務する者であれば、数日間の講習と簡単なテストに合格すれば取得できる。そして資格の有無を問わず、主催旅行の添乗をすることは手配旅行より難易度が高い。それは主催旅行の場合、ツアー客同士

が初対面で、共通性が無い。すなわち旅行の目的も十人十色だからである。

そして7月。いよいよスイスを訪れるチャンスが巡ってきた。夏はヨーロッパツアーに人気が集中する。特に夏の短いスイスは7、8月がベストシーズンに当たる。

ツアー客は15名。旅行形態は主催旅行。メンバー表を見ると、絵画教室のグループ、お孫さんを連れて家族連れ、そして愛知大学を退職された先生などから構成されていた。

出発前の旅行説明会で、「安田は今回でスイス渡航が3回目です。」と上司に紹介され、スイスどころかヨーロッパが初めての私は、スイスの資料を掻き集め、必死にスイス通の顔を作って出発の日を迎えた。

世界中からスイスへ集まる旅行者の約7割が日本人というだけあって、チューリッヒ空港では、荷物を乗せるターンテーブルが日本人観光客のスーツケースで溢れ返っていた。

バスで市内に向かい、中央駅近くのホテルにチェックインする。目的地へ辿り着いたうれしさからか、長時間のフライトの疲れをまるで見せないツアー客と市内を散歩することにした。ヨーロッパの夏は1日が長い。夜8時を過ぎてもまだ昼間のように。私達は市内一の目抜き通りバーンホフ通りを歩き、トラムに乗車する。路上のカフェで新聞を読み、ゆったり過ごす老夫婦がとても印象的だった。そして、フラウエンミュンスターが見えた所で下車し、旧市街へ。石畳の坂を歩くと「スイスに來たのだ。」と感激が押し寄せてくるが、ぐっと我慢し冷静さを装いホテルへ戻った。

スイスは物価が高い。人件費も高い。通常、他のヨーロッパ都市では各地の観光案内を現地のツアーガイドに委託する。しかしスイス旅行はツアー代金がかさむため、ツアーコンダクターがガイド業務を行うことが多い。私も例外ではなかった。資料を読みながらバスの中でバスガイド役を務める。入社当時のガイド業務が意外なところで役に立つものだ。しかしバスが移動するに連れ「アルプスの少女ハイジ」に描かれたスイスらしい風景が眼前に広がると「あの山の名前は？」とツアー客の質問が始まる。地図上の山と目の前の山を一致させるのはとても困

難である。困っている私を見兼ねて、バスの運転手が隣でこっそり答えを教えてくれる。親切な運転手に会おうとツアーコンダクターも仕事楽しい。

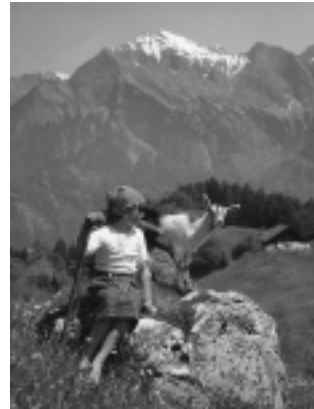
次の訪問地は人気リゾート地、グリンデルワルト。最大の目的はユングラウヨッホ訪問である。標高3,454mのヨーロッパ最高地点展望台まで登山電車で行けるので大変便利だ。スイスは世界で最も鉄道が発達している国。国土は41,288km²で九州とほぼ一緒だが、そこには5,000kmを超える鉄道網が張りめぐらされている。特に有名な登山鉄道は13路線を数える。スイスでは国内のどんな地点からでも必ず16km以内に、旅客鉄道の便があるというから驚きだ。

残念ながらユングラウヨッホは霧の中。ツアー客の残念そうな顔を見るとなんだか申し訳ない気持ちになった。しかし私達は気を取り直し、ハイキングを行うことにした。途中駅、クライネシャイデックで電車を降りる。眼前にはユングフラウ、メンヒ、アイガーの3名峰が聳え立つ。先程までいたユングフラウヨッホ駅は山の岩壁の中なので、ここからの眺めの方がすばらしい。

スイスのハイキングコースはよく整備されていて、初心者や年配の人でも気軽に楽しむことが出来る。適所に方向と所要時間が記された標識があり、黄色は初心者、赤は健脚向きと識別されているのでとても便利である。

グリンデルワルトに2泊した後、私達はアンデルマット駅へ。ここから氷河特急に乗車し、マッターホルンの麓の町ツェルマットへ。この列車は、特急でも平均時速は34kmと遅く、氷河と名付けられているが、現在は氷河近くのトンネルを通るのでそれを見ることはできない。しかし、最大標高差1,429mを走り抜けるとあって景色の変化はとても迫力がある。ツアー客は約4時間の乗車中ずっとカメラを手にしていて。

ツェルマットの宿泊先は駅前の4星ホテル。到着時間が他の団体より早かったので、全員がマッターホルンを遠望できる部屋を確保できた。私も一安心していると、ツアー客の一人から連絡が入る。ご立腹の様子なので理由を尋ねると、「部屋が狭い」と言う。急いでその部屋を訪れると、なるほど最上階の屋根裏部屋なので天井が斜めになっていてその分圧迫感がある。しかし部屋からの眺望はすばらしく、



視界を遮るものは何も無い。正面にはマッターホルンが聳えていた。私は仕方なくルームチェンジの旨を伝えるべくレセプションへ。すると今度はフロントマンが真っ赤な顔をして怒り出した。「あの一番良い部屋を気に入らないとは何事だ。」と。確かに彼の言うことは当たっているが「その客は残念ながら閉所恐怖症だ」と説明し、その場を凌いだ。サービスとは本当に難しいものだとこの時つくづく感じたものだ。

そんなわけで、最後の夜をジュネーブで過ごし、私のスイス初添乗は無事に終了した。9日間という長い日数のお陰で15名のツアー客ともとても親しくなり、7年経った今でも親交がある。ツアーコンダクターのすばらしさはここにある。朝食から夕食までツアー客と常に行動を共にする。他人には言えないようなわがままも平気で言う。職域を超えて人間同士の関係が生まれるのだ。確かにいろいろな国を訪れることもこの仕事の魅力である。私もその後様々な国を添乗した。遠くはブラジルまで。しかし、思い出すのは不思議と観光地ではなく、ツアー客の顔であり、言葉である。ツアー客も同様に、ツアーコンダクターの顔は忘れないという。ある意味、ツアーコンダクターの善し悪しで旅行の満足度を決定付ける事もあるだろう。このプレッシャーを糧にして、これからもいろいろな人との出会いを楽しみにこの仕事を続けていきたいと思う。

ところで、憧れの地スイスへは初添乗以来、毎年訪れている。ガイド業も板につき、山の名前も沢山覚えた。しかし、毎年違う場所に姿を現すかわいらしい高山植物の名前を覚えることは、今でも至難の業である。

LL Tea Time

韓国と韓国人の素顔2002

国際コミュニケーション学部4年

山田知美

私は去年一年間韓国の中央大学で交換留学生として勉強しました。

留学して驚いたことは進んだシステムです。例えば履修届は各個人が大学のホームページにアクセスしてその場で申請します。学生証も大変便利になっていて、銀行のカードとソウル市内の交通カードの機能を兼ね備えています。また学科ごとにホームページがあり、そこで授業やテストの情報を交換したりします。その他に愛知大学での授業と違う点は学生が積極的なことです。韓国の学生は先生に質問したり、要望を申し出たりします。図書館で勉強する学生も多く、テスト週間には早朝から席取りをする人もいます。大学には兵役を終えた20代後半の男子学生の姿も目立ちます。また芸術面で有名な大学なので、演劇、舞踊、コンサート、各種発表会を校内で見ることができます。

日韓の若者には様々な相違点があるように感じました。政治に興味があり、大統領選挙、デモや抗議などに積極的な学生も比較的多いようです。愛国心や自尊心といった言葉もよく耳にしました。それから韓国女性はかなり美に対して敏感です。日本より顔を変えることに抵抗がなく、整形した人もたくさんいました。それとともに韓国社会が女性に与えるプレッシャーの大きさを感じました。もちろん買い物、映画、飲み会、カラオケなどをして楽しむところは日本の若者と基本的に変わりません。

韓国人は同性であっても異性であっても触れ合いが多く、コミュニケーションをととても大事にします。

手をつないだり、腕を組んで歩いたりします。何かを食べる時は必ず分け合って食べます。支払いは日本人のようにきちんと割り勘はせず、年上の人や良いことがあった人が払います。友達同士では、食事代を払う人、カラオケ代を払う人のように分けます。そして困った人を見ると必ず助けてあげるのが韓国人です。「情」が深く、大勢で何かをすることが好きようです。家族関係も日本より深く「親の愛は降り注ぐ愛」という言葉が示すように、親が子供を思う気持ちは相当のものです。恋人関係も頻繁に連絡をとる点や、プライバシーがほとんどない点が日本とは異なるように感じました。

ちょうど留学した時に、ワールドカップ、大統領選挙など大きな出来事があり貴重な体験ができました。個人的にも大学生活を通じ多くのことを学びました。帰国後、目標にしていた検定にも合格し、改めて充実した一年を実感しました。最後に印象に残っている言葉があります。「友達同士でありがとうなんていない」です。これは友達のために何かすることを惜しまない韓国人の性格を現した言葉です。何と言っても韓国の魅力は人の暖かさや優しさです。私の留学はそんな友人たちに支えられたものでした。



日韓交流プログラムに参加して(ソウルで)

魅惑のタイ留学

国際コミュニケーション学部4年

杉 本 佳 織

私は、タイのピサヌロークという町にあるナレースワン大学に1年間留学していました。この1年間いろんな事があったけど、ここで経験したことは大きな糧となりました。その中でも一番よかったことは友達ができただけです。みんな明るくて、優しく、勉強熱心で、これからずっと仲良くしていきたいです。友達・先生方をはじめ、市場や学食のおじちゃん、おばちゃんたちにも本当にお世話になりました。はじめにすべての人に感謝をしたいと思います。基本的にタイ人はフレンドリーで明るいです。

ピサヌローク市は、バンコクからバスで5時間ほどかかります。小さな町で、郊外には農村が広がっているのんびりとしたまちですが、タイで一番美しいといわれている仏像が安置されているお寺があることで有名です。田舎だからこそのんびりと過ごせ、また人も親切だったのかもしれません。ナレースワン大学は、そんな町にあるのですが日本では考えられないほど広いです。校舎もたくさんあるのですが、いくつもの池や広場もあり緑が豊かで、生活博物館や布博物館、太陽化学研究所などもあります。キャンパスが広いので、バスを使って移動しなければなりません。

次に大学の授業ですが、留学生ということで、様々な授業を取る事ができました。タイダンスやタイ楽器もなったし、タイは観光が盛んなので観光学が学べる大学が多く、ナレースワン大学もその1つです。観光学のある授業では、実際にみんなで旅行をして、ガイドについて学んだり、ホテル研修（一流ホテルでランドリー、厨房、スイートルーム、マッサージ、ジム、カフェ、バー見学や、実際にフランス料理を食べながらテーブルマナーを学習、スイートルームでスパ・アロマ解説など。）を行ったり、バンコクでは、チャイナタウンを、東北部では、ピマroi遺跡を観光しました。こんな授業は日本では絶対

にありません!!この研修は、とても感動したし、本当にいい経験になりました。また、学生はもちろん、先生方と一緒に旅行するので楽しみも倍増です。また、タイや各国の結婚式も再現して発表しました。これは、その国の衣装を着て、結婚式を行うもので、私はタイの結婚式の班になり、花嫁の付き添い役としてタイの民族衣装も着ることができました。

授業のほかにも、日本語学科の子達と日本のことを紹介するお祭りで、餅つきをしたり、てんぷら・とんかつなどの日本の人気料理を販売したり、茶道の実演、エイサーの発表も行いました。そして、タイにもアメリカのプロムパーティーみたいなものがあるのですが、タイでは4年生の秋からは研修に出かけてしまうため、その前にホテルのホールを借りて、各学科ごとに集まってパーティーを行います。みんなめっちゃくちゃおしゃれをして、普段とは別人です。また、クリスマスには学部の広場で、友達がオカマショーをやったり、行事も盛りだくさんです。学校が休みに入ると、友達と旅行に出かけたりしました。

このようにタイでの1年はあっという間に過ぎてしまいました。これを書きながら、タイが恋しくなっていました。旅行だけではわからないタイを知る事もでき、たくさんの友達もでき本当に良かったです。タイについては一言ではとても言い表せません。そんなタイに少しでも興味のある方は、ぜひ一度タイに行ってみてください。



観光学の旅行研修（ピマroi遺跡で）

愛知大学言語学談話会 — 第28回 —

公開講座「言語」2003後期 プログラム

2003年

⑦ 10月4日(土)

「言語学という思想—ソシュールとサピアー—」

高橋 秀雄

(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

⑧ 11月8日(土)

「看板広告における経路探索の方法」

片岡 邦好

(愛知大学法学部助教授)

⑨ 12月6日(土)

「文法と文脈—談話情報が動機づける統語構造—」

須田 淳一

(愛知大学短期大学部助教授)

2004年

⑩ 1月10日(土)

「ドイツ語と英語の並列関係について」

トーマス・M・グロース

(愛知大学国際コミュニケーション学部教授)

時間：午後2時30分～4時30分

どなたでも参加できます。(登録不要)

聴講無料

場所：⑦⑧…ナオリ会館 第3集会室

〒461-0002 名古屋市東区代官町27-5

☎052-935-6011

(地下鉄桜通線)「車道」下車

1番出口より徒歩7分

⑨⑩…愛知大学車道校舎224番教室

〒461-8641 名古屋市東区筒井2-10-31

☎052-937-8111

(地下鉄桜通線)「車道」下車

1番出口より徒歩2分

外国語検定試験合格者に 奨励金を贈ります！

語学教育研究室では外国語検定試験合格者に奨励金(図書券)を贈る自主学習支援の制度を設けています。2002年度は延べ89名の学生に奨励金が贈られました。

2003年度も下記により受付しますので合格者は申し出てください。

記

1. 対象学生

愛知大学豊橋校舎学生及び短大生(大学院生、オープンカレッジ生、科目等履修生、研究生は除く)

2. 奨励基準

追って教務課およびLL自習室の掲示板に示します。

3. 受付期間

2004年1月15日(木)～1月31日(土)

4. 手 続

学生証および合格通知書を3号館LL自習室カウンターまで持参し、申し出る。

5. 奨励の対象

2003年2月～2004年1月の間に合格した分に限る。

自習室だより

LL自習室をもっと利用しよう！

自習室にはビデオ、DVD、CD、カセット、本など語学自習に役立つ資料がたくさん備えられています。

○語学検定試験対策の資料を利用して検定試験に挑戦してみよう！

○NHK語学講座でじっくり学習し、楽しく語学力を身につけよう！

○カセットブースで授業用テープを学習し、授業の予習・復習を！

○海外の映画を観て外国文化や風俗・習慣の勉強を、そしてヒヤリングアップにつなげよう！

などなど、あなたに役立つことがいっぱいです。これから何かを始めたいと思っているあなた、ぜひ、LL自習室を活用してください。

LL自習室は3号館1Fです。

講義期間中の開室時間は 月～土 9:10～21:30